



平成 31 年 4 月 25 日

高齢者はなぜ「迷惑」を口にするのか？長生きはめでたいことなのか？ — “老い” をめぐる論文集の刊行

◆発表のポイント

- ・“老い” をめぐるさまざまな問題を研究する「老年学」の重要性は増していますが、これまでこの分野は人文学分野との研究成果の共有が十分になされていませんでした。
- ・人文学分野に加え、医療や介護の分野からの視点や、異なる時代や文化圏などの観点から行った“老い” の捉え方や観念について、検討した研究成果をまとめた論文集を刊行しました。
- ・この分野について歴史的、比較文化的に考察する必要性があることを明らかにしました。

超高齢・人口減少社会を迎えた現代日本において、“老い” をめぐるさまざまな問題が噴出しています。こうした問題を研究するのが「老年学」という学問分野です。しかし、これまでの「老年学」研究では、人文学の分野との研究成果を共有が十分になされていませんでした。

この研究状況を踏まえ、本学大学院ヘルスシステム統合科学研究科の本村昌文教授、日笠晴香講師、吉葉恭行教授と東北大学学術資源研究公開センターの加藤諭准教授、福井医療大学保健医療学部の近田真美子准教授を中心としたプロジェクトチームは、人文学と「老年学」との架橋を試み、協働する基盤の構築を目指し、その成果をまとめた論文集『老い—人文学・ケアの現場・老年学』を制作。ポラーノ出版から3月28日に刊行しました。

プロジェクトでは、医療や介護の現場における“老い” の捉え方（第1部）、過去の日本における“老い” の捉え方や“老い” の観念（第2部）、日本と異なる文化圏における“老い” の捉え方や“老い” の観念（第3部）を検討。それぞれの論考をふまえ、①近代日本における「老年学」の草創期（明治末～大正期）では、人文学の研究が「老年学」の全体構想の中に位置づけられており、さまざまな分野を総合するという意識があったこと、②過去から現在まで「40歳」「40代」が身体的な問題から“老い” のはじまりと捉えられており、この年代の意味をあらためて考える重要性、③“老い” を考える際に「迷惑をかけたくない」という意識が日本において過去から現在にまで共通して見られたこと—といった点から、この意識について歴史的、比較文化的に考察する必要性があることが明らかになりました。

◆研究者からのひとこと

本書は3部構成（現代日本における「老い」／変容する「老い」／「老い」の多様性）からなります。哲学、宗教学、思想史、日本史、西洋史、日本文学、看護学などさまざまな分野からの論考に加え、在宅医療や施設の現場、老いと年齢、介護者サポート活動、障がいをもつ子どもの親の「老い」を娘の立場からみつめる—といったテーマのコラムを設け、多角的に「老い」について考えられるようにしています。



本村教授



PRESS RELEASE

<現状>

超高齢・人口減少社会を迎えた現代日本において、“老い”をめぐるさまざまな問題が噴出しています。こうした問題を研究するのが「老年学」という学問分野です。しかし、これまでの「老年学」研究は医学、看護学、生物学などの自然科学、経済学、社会福祉学、法学など社会科学の分野がその中心を担っており、人文学の分野の研究成果は十分に共有されていませんでした。現在、一律に何歳以上を高齢者と規定したり、“老い”＝「衰えていくこと」と一義的に捉えたりするのではなく、多様な高齢者のありようや“老い”に光を照射する必要性が生じています。こうした多様性を明らかにできるのが、人文学の分野からの“老い”に関する研究です。

<成果の内容>

現状の研究状況をふまえ、本村教授らのプロジェクトチームでは医療や介護の現場における“老い”の捉え方（第1部）、過去の日本における“老い”の捉え方や“老い”の観念（第2部）、日本と異なる文化圏における“老い”の捉え方や“老い”の観念（第3部）を検討し、「老年学」と成果を共有する基盤の構築を目指して、その成果を論文集『老い—人文学・ケアの現場・老年学』にまとめ、刊行しました。

第1部では、多くの高齢者が口にする「迷惑」という語を手がかりとした現代の“老い”の考察をはじめ、看護師や理学療法士の“老い”の捉え方、近年重要性が高まってきている先端科学技術を駆使した介護機器をめぐる問題を扱い、現代日本における“老い”の諸相を明らかにしました。

第2部では、文学作品（『栄花物語』、『徒然草』の注釈、『フランダーズの犬』など）を素材とした“老い”の考察や、「老年学」という学問の淵源の検討などを通して、過去の日本における“老い”の諸相を解明しました。

第3部では、古代ギリシアやポーヴォワールの『老い』などの考察により、西洋世界における“老い”の諸相と、古代儒教における“老い”と現代中国における“老い”をめぐる問題を取り上げ、日本以外の地域における“老い”の諸相に迫りました。

それぞれの論考をふまえ、①近代日本における「老年学」の草創期（明治末～大正期）では、人文学の研究が「老年学」の全体構想の中に位置づけられており、さまざまな分野を総合するという意識があったこと、②過去から現在まで「40歳」「40代」が身体的な問題から“老い”のはじまりと捉えられており、この年代の意味をあらためて考える重要性、③“老い”を考える際に「迷惑をかけたくない」という意識が日本において過去から現在にまで共通して見られること—といった点から、この意識について歴史的、比較文化的に考察する必要性があることが明らかになりました。

<社会的な意義>

これまで自然科学と社会科学の分野が中心であった「老年学」に対して、人文学の分野からの“老い”に関する研究の有する意味を明確にするという研究上の意義があります。また、今後ますます重要性を増す高齢者の生き方や“老い”についての新たな捉え方を提示するという点で、社会的にも大きな役割をもつと考えられます。

今後は、本論文集の成果として明らかになった、“老い”を考える際に多くの人が抱く「迷惑をか



PRESS RELEASE

「けたくない」という意識に着目し、その本質を明らかにすることを通して、老いから死に至るまでの生き方を支える精神的な基盤の解明を目指します。

■書誌情報

書名：老い一人文学・ケアの現場・老年学

編者：本村昌文、加藤諭、近田真美子、日笠晴香、吉葉恭行

出版社：ポラーノ出版

刊行年月日：2019年3月28日

■研究資金

本研究は、科研費・基盤研究B（特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」）で採択された「ケアの現場と人文学研究との協働による新たな〈老年学〉の構築」（課題番号 26310105、研究代表者：本村昌文、2014年度～2018年度）、岡山大学文学部プロジェクト研究（2014年度～2017年度）の支援を受けて実施しました。

<お問い合わせ>

岡山大学 大学院ヘルスシステム統合科学研究科

教授 本村昌文

（電話番号）086-251-7395



岡山大学は、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」を支援しています。